

1982年、島田哲男氏は井戸尻編年に基き、松本市牛の川・雨堀遺跡の出土土器を分析、松本平Ⅰ期～XⅢ期の変遷を設定された。そのうち縄文中期初頭については、松本平Ⅰ期（九兵衛尾根Ⅰ式）、Ⅱ期（九兵衛尾根Ⅱ式）に分けられたが、当時良好な資料に恵まれなかつたため、Ⅰ期は空白期、Ⅱ期は前半の様相が不明となつており、資料増加が待たれていた。

その後、1987年林山腰遺跡・向畠遺跡・前田木下遺跡、1988年向畠遺跡Ⅱと中期初頭の遺構・遺物の調査が相次ぎ、松本平Ⅰ・Ⅱ期の空白を埋め得る良好な資料が整つてきたと言える。また近年、当該期の土器研究も飛躍的に進歩し、従来混乱を招いていた既存型式が整理され、その系統、変遷が明らかになりつつある。

ここでは、近年最も整理がなされている三上徹也氏の研究成果に基き、雨堀・林山腰・向畠・前田木下遺跡の資料を主に用いて、松本平の中期初頭土器について考えたい。変遷は大きく4段階となり、第1段階は三上徹也氏のⅠ段階（今村啓爾氏の五領ヶ台Ⅰ式）、第2～4段階はⅡa～Ⅱc（五領ヶ台Ⅱ式、神谷原・大石式）に相当する。尚第1段階については、未だ資料が少なく、表採品も含んでいる点をおことわりしておく。

(1) 第1段階（第89図1～9）

林山腰土壙51出土資料他が挙げられる。器形・文様帶のあり方により縄文系・沈線文系の2者に分類される。これは各段階とも同様で、後者は踊場系とされた一群である。

縄文系土器（5・3・8・9）

①器形 深鉢、鉢が存在する。深鉢は3に代表される2段ないし1段くびれるキャリバー形と、9の様な円筒形がある。前者の胴部は裾でやや張り出すものがある（5）。2段にくびれるキャリバー形は、文様帶のあり方により、下段のくびれが口頸部とも胴部とも受けとれるが、ここでは胴部としておく。尚キャリバー形には4単位の波状口縁をもつものも存在する。鉢は林山腰で1点知られる（8）。口縁部が直立ないしやや内湾し、小径の平底をなすものである。

②文様 口縁部の細線文、胴部の縦位帶縄文が特徴的である。文様帶は基本的に口縁部2段、胴部1段に分かれ、横位に展開される。口縁部上段は縦位に細線文が施され（3・8）、時に格子目となる事もある。8は口唇に爪形文を施している。9は横位に縄文を施文し、新しい様相と考えられる。下段は細線文と三角印刻文の組合せや、山形押引文、瓦状押引文ないし半截竹管先端による刺突文（3・9）が充填される。下段～胴部にかけて、橋状把手が4単位付加されるのも特徴である（3）。胴部は地文として、両端ないしは片端に結節をもつ縄文を縦位に回転する。縄文帶の間隔は十分にとり、羽状縄文も存在する。施文は胴上部に行われ、口縁部と同様細線文や平行沈線・三角印刻文の組み合せによる区画文や、「Y」字状文（8）が多く見られる。5は底部付近まで、平行沈線による区画が見られ、細線文による格子目文上に三角刻文や逆「U」字形の構図が描かれる。

沈線文系土器 (1・2・4・6・7)

①器形 全形の判明する資料はない。大きく外開する頸部に、「く」の字形に内屈する口縁部を取り付くものである。胴部の形態は6の様にストレートなものである。

②文様 いわゆる「集合沈線文」を特徴とする。文様帶は口縁部、頸部、胴部に3分される。各文様帶内へは、半截竹管状工具により縦位、斜位、格子目、羽状、山形、瓦状押引等の平行沈線が充填される。口縁部文様帶は格子目(1)、斜位沈線(4)、瓦状押引文の他、羽状沈線も見られる(2)。口縁部には突起が1単位付加され(4)、口唇部に爪形文を施すもの(7)も多い。1の格子目文は斜位沈線上にソーメン状の粘土紐を貼付して描出し、古い手法と言える。推定4単位の橋状把手を有する点は、縄文系の要素と考えられる。頸部文様帶は斜位(2)ないし縦位(1・4・7)の平行沈線文が施される。縦位の場合密に行うものと間隔をおくもの(1・4・7)があり、後者は地文に縄文を施すものが多い(1・7)。胴部文様帶は3分帶の構成となるものが多く、上2分帶には格子目文、山形文が多く描かれる。最下段は縦位の構成となり、縦位沈線、山形文、羽状文等が施文されるようである。6は雑な施文だが、胴部全体が縦位の構成と考えた方が良さそうな土器である。

以上、本段階の土器は出土例が未だ少なく、松本平での様相は判然としない。本段階内での新旧は、ソーメン状粘土紐貼付の見られる1がより古い段階、口縁部に帶縄文の施される9を新しい段階に位置づけることができよう。沈線文系・縄文系の共伴関係は、林山腰遺跡土壙51で捉えられる他は、一括資料が見られない。

(2) 第2段階 (第89図10~19、第90図20~37)

林山腰遺跡土壙21等遺構内一括資料が多く出土している。

縄文系土器 (10~12・18・20・22・24~35・37)

①器形 前段階同様キャリパー形と円筒形の深鉢が見られる。前者は2段にくびれるもの(18)が減り、後者はその量を増す。波状口縁(19・25)も存在する。底部の張り出すものは少ない様である。

②文様 口縁部の帶縄文が特徴的である。文様帶のあり方は前段階と同様である。

口縁部文様帶は上段に細線文に代わって横位縄文が施されるが、爪形文(10・37)、無文(18)もある。又、口唇部に刻目を入れるものも多い(11・12・18~20・31)。上下段の区画は平行沈線、単沈線で行われ、後者には刻目が施される場合が多い。(11・12・18・21・28・32)がこれは三角印刻文の変化と考えられる。下段の文様帶は基本的に無文となる。橋状把手や貼付突起がしばしば見られる(10・11・16・20・25・26・27・28・35・37)。一方施文されるものも少数あり(22・35)、胴部と同様の文様が展開されるようである。35は地文に細線文を用いている。胴部との境には隆帯が横走するものが多く見られ(10・12・20・22・25・27・28・31・33・35)、突起を4単位貼付する(18・19・21・22)。胴部文様帶は「Y」字状文及びその変化と考えられる弧線文(10・14・18・22・33)の他、横帶区画内に玉抱き三叉文(27・28)、鍵形・菱形・「B」字文等の構図を描くもの(12・35・

37) も存在する。無文となるものも多い (20・24・31・32)。地文の縄文は隙間なく施されるようになる。尚33は4単位の懸垂隆帯を有しており、新しい要素として捉えられる。

以上その他、全く施文されない一群も少数存在する (29・30・34)。

沈線文系土器 (13~17・19・36)

良好な資料がなく、図示したものの多くは縄文系・沈線文系の両要素をもつ土器である。

①器形 基本的には前段階と同様で、「く」の字形に屈折する口頸部及びストレートな胴部形態を呈する (14)。13は屈折部を省略した形態と言えるが、他はキャリパー形を呈し縄文系の器形と言えよう。

②文様 文様帶のあり方は第1段階と比べ大きな変化はない。口縁部文様帶は格子目文・斜線文・瓦状押引文ないし結節平行沈線文 (14) が見られる。口唇部の爪形文もある (23・36)。頸部は縦位ないし斜位の平行沈線が施される (14・15・16・23・36)。頸～胴部の区画は隆帯で行っている (14・16・36)。胴部文様帶は下段の縦位施文が拡大され (13・36)、36では懸垂隆帯が付される。一方上位1段のみ施文され下段が省略されるものも多い (16・19・21)。区画内は格子目文 (13)・縦位平行沈線文 (16・19・21・36) が充填される。

本段階内での新旧は、10の三角印刻文、13の胴部文様帶区画が3段である事等、向畠遺跡土壙10出土資料に古い様相が窺え、逆に林山腰遺跡出土資料、特に土壙21の一括資料中、33・36に胴部縦位懸垂隆帯が存在、新しい様相を示すものと捉えられよう。

(3)第3段階 (第91図38~48、第92図49~54)

雨堀遺跡II次土器一括廃棄資料が挙げられる。沈線文系土器及び浅鉢は続く第4段階との細分が出来ない。従って本段階で述べることとする。

縄文系土器 (38~43・49~53)

①器形 深鉢はキャリパー形と円筒形が認められるが、両者に胴部の膨らむものが存在する (39・41~43)。浅鉢は直線的に強く開くもので、内面の肥厚部に施文される。

②文様 口縁部の単沈線による弧線文が特徴である。口縁部文様帶は上段の幅が狭くなり、横位縄文は下段へも施文される。42は縦位に撚糸文を施している。下段の弧線文は2段階の胴部弧線文の転移と考えられ单沈線3条を一束とし、上向きに施文される。弧線の谷には玉抱き三叉文が例外なく施される。上下段を区画する横位沈線は、刺突を施すものが減り、弧線文との間に交互に行う連続「コ」の字文となる (40・41・43)。38は下向きの弧線文が描かれるもので、前段階27・28からの変化が考えられよう。円筒形土器は口縁部文様帶が省略傾向にある (39・41)。胴部の文様帶は隆帶ないし沈線の4単位の懸垂文が一般化する (38~40)。懸垂隆帯の上端には、「Y」字状文の変化したと考えられる「V」字状の貼付 (40) ないし「Y」字状に施されるものが存在する。区画内は頸部の横走隆帯に沿って2~3条の沈線文が施される程度のものと、41の様に弧線文が施文されるものがある。

この他、無文の土器群（49～51）が前段階同様存在する。浅鉢は口縁部内面肥厚部分に3条前後の幅広の結節沈線文が施文され、連続「コ」の字文や三叉文が時に付加される。波状口縁も存在する。

沈線文系土器（44～48）

資料が少なく、第4段階との細分もできない。前田木下遺跡2住出土資料を呈示する。

①器形 深鉢は前段階の形態を基本的に継承するが、口縁部の内折は幅が狭くなり、頸部も同様に短くなる。胴部はストレートなものと、上位の張るもの（45・48）が存在する。尚47は口頸部が省略され、本段階以後多く見られるものである。

②文様 文様帶のあり方は口縁部・頸部・胴部の3段に分別される。口縁部は上下に爪形文を施す太い隆帶を有し、狭い区画内に連続「コ」の字文を行う。施文されないもの（48）や、内折部分が省略される形態も存在する。又、隆帶による4単位の突起が付されるのも特徴的である。

頸部は縦位の平行沈線文、格子目文（48）が施文される。44は逆「V」字形の区画内に格子目文を行っている。胴部文様帶は縄文系同様、4単位の懸垂文が顕著となる（46～48）。これらは隆帶で行うもの（47・48）と数条の平行沈線によるものがあり、後者には連続「コ」の字文が伴う（46）。47は隆帶上端が「Y」字状になり、地文、突起とともに縄文系との関連を思わせる。区画内には横位の文様帶が描かれるが、これは前段階の13・16等が懸垂文により分断された形となる。1～2段の区画を行うものと多段に行うものがあるが、上段には斜線文（47）や格子目文（45）、横位平行沈線文（45）が多い様である。45・48の様に逆「U」字形ないし「コ」の字形の区画を行うものも顕著である。又横位平行沈線文には連続「コ」の字文が付加されるものも多く存在している。

第3段階の資料は、縄文系・沈線文系の二者がまとまって出土した例がない。雨堀遺跡IIは前者が主体で、後者は少量伴っている。前田木下遺跡ではその逆である。

（4）第4段階（第91図44～48・第92図49～65）

雨堀遺跡I次B1住、同II次一括土器廃棄資料を呈示し得る。

縄文系土器（55～65）

①器形 深鉢・浅鉢がある。深鉢はキャリバー形の口縁部が狭くなり、円筒形は口縁部が外反する。56・57は特に顕著である。両者に波状口縁が見られる（56・57・64）。浅鉢は前段階同様で、54は外傾する口唇に角押文が施文されている。

②文様 キャリバー形土器は口縁部の弧線文が隆帶により描出されるが、良好な資料を呈示し得ない。一方新しい手法として、口縁部に「T」字状文や角押文を用いるものが存在する（58・60・64・65）。これらの頸部には狭い楕円区画文が見られ（55・58・60・64）、懸垂隆帶がランク状になるものが現れる（58）。円筒形も同様で、38の弧線文の変化と考えられる63は隆帶化・重三角区画文化している。59・62は楕円区画文・「Y」字状の懸垂隆帶が見られる。口縁部文様帶は縄文が顕著（56・59・63）だが、62は角押文による斜位沈線、57は部分的に押引を施す単沈線により玉抱き三叉文を描く。これらの土器には金雲母を多く含むものが見られる点も特徴的であろう。

沈線文系土器 前段階で呈示した。雨堀I次B1住では口縁部の内折が省略されたものが破片で出土している。

本段階も、沈線文系、縄文系の良好な伴出資料を欠く。しかし縄文系が主体的ではあるが、確実に沈線文系も伴っている。資料の一括性としては雨堀I次B1住が良好だが弧線文ないし重三角区画文の系列が欠除している。

以上各段階を概観してきたが、最後にまとめとして松本平の地域性について問題点を列記する。

- ①第1段階 資料不足ではあるが、塩尻市竜神平、女夫山ノ神遺跡資料も含め検討すると、沈線文系の頸部縦位平行沈線文が間隔をおき、縄文地文となるものが顕著である点（1・4・7）。
- ②第2段階 a 沈線文系が少なく、多くが縄文系との折衷で存在すること。b 「B」字文等が縄文系に顕著である事。

- ③第3・4段階 第2段階に増して沈線文系が極めて少ない。但し前田木下遺跡は例外的だが、一部の調査のため全容は不明である。

- ④各段階を通じ、在地の系統の中に撲糸文や反撲、付加条等の原体を地文にもつものが他地域よりも多い事。

以上の諸点のうち、①・②b・④については、当地域が地理的に北陸に近く、北陸地方の朝日下層式・新保式の影響が強いという点で理解されるのではないだろうか。ちなみに①・②bについては、朝日下層式や新保式に多く見られるようである。

②a・③については、八ヶ岳山麓の大石遺跡等とは全く逆であるが、同じ八ヶ岳山麓および諏訪湖盆地の頭殿沢遺跡や船靈社遺跡は大石遺跡程顕著ではない。遺跡毎の差異が激しいが、続く平出3類Aの分布域の北限が松本平である点を考えれば沈線文系の減少も理解されるのではないだろうか。今少し各遺跡での実態を見る必要があろう。これらの点を除けば、松本平での中期初頭土器の変遷過程は、諏訪湖盆地や八ヶ岳山麓と基本的には同じ流れをたどると言えそうである。

まとめとしては簡略に過ぎるが、紙幅の都合もありしめくくりとしたい。 (竹原 学)

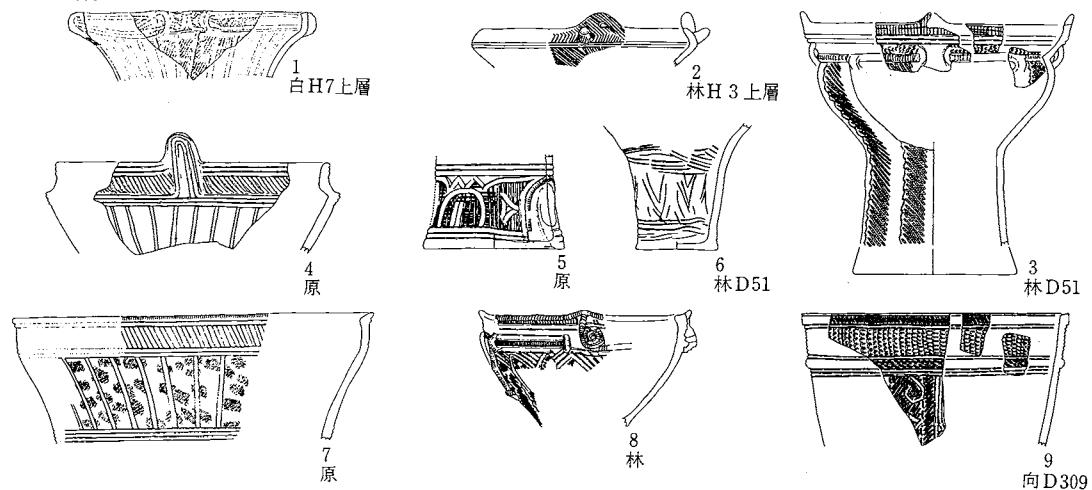
主要参考文献

- 今村哲徳 1972 「宮の原貝塚」 武蔵野美術大学考古学研究会
島田哲男 1982 「縄文時代中期における松本平」『松本市内田雨堀遺跡—第2次—』 松本市教育委員会
三上徹也 1988 「梨久保式土器 再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要 1』 長野県埋蔵文化財センター
南 久和 1985 「北陸の縄文時代中期の禡年—南久和著作集第1集』 転形書房
山口 明 1980 「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」『縄文土器の交流とその背景』 静岡県考古学会シンポジウム 4
山本典幸 1988 「五領ヶ台式土器様式」『縄文土器大観 第3巻 中期II』 小学館
真駒遺跡発掘調査団 1986 「真駒遺跡」
長野県教育委員会 1976 「大石遺跡」『長野県中央道埋文報告 昭和50年度』
同 1980 「船靈社遺跡」『 同上 昭和52・53年度』
同 1981 「頭殿沢遺跡」『 同上 昭和51・53年度』
同 他 1988 「竜神平遺跡」『中央道長野線埋文調査報告書 2』
松本深志高校地盤部 1978 「女夫山ノ神遺跡発掘調査報告」『あぜ道 27』 他

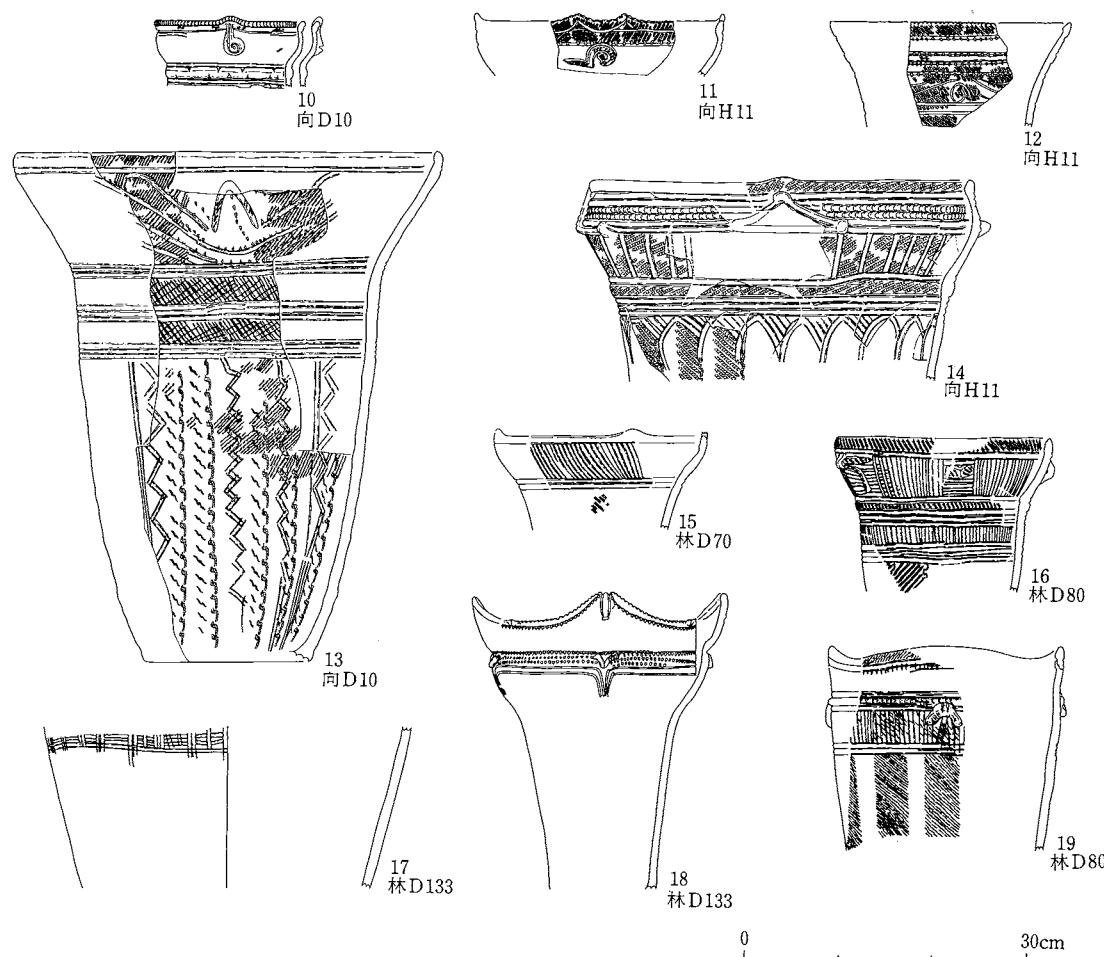
資料出典

- 松本市文化財調査報告No.20 (雨堀遺跡I次) 1981・23 (雨堀遺跡II次) 1982・27 (原度前遺跡) 1983・34 (白神場遺跡) 1985・61 (林山腰遺跡) 1988・62 (前田木下遺跡II) 1988

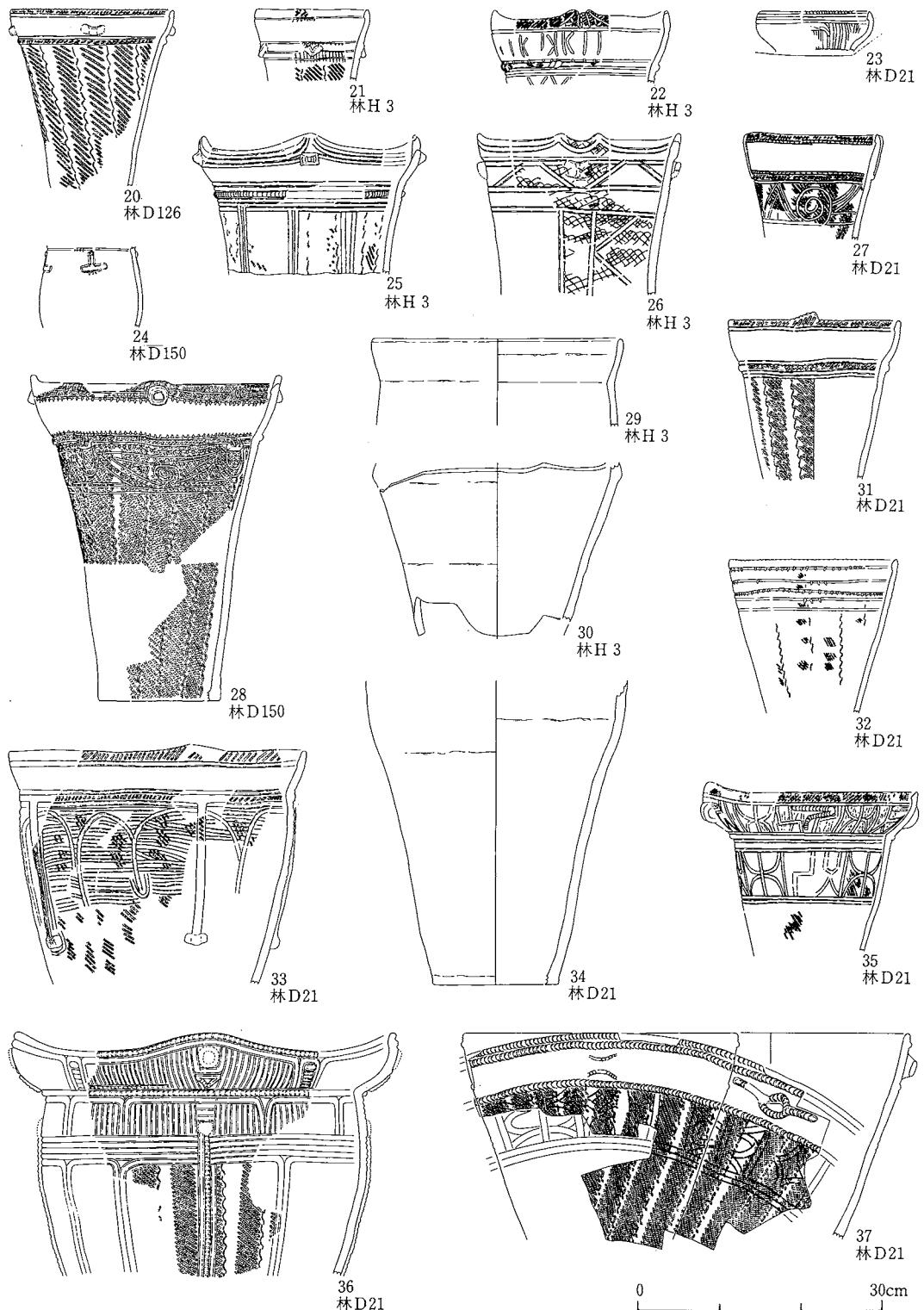
第1段階



第2段階

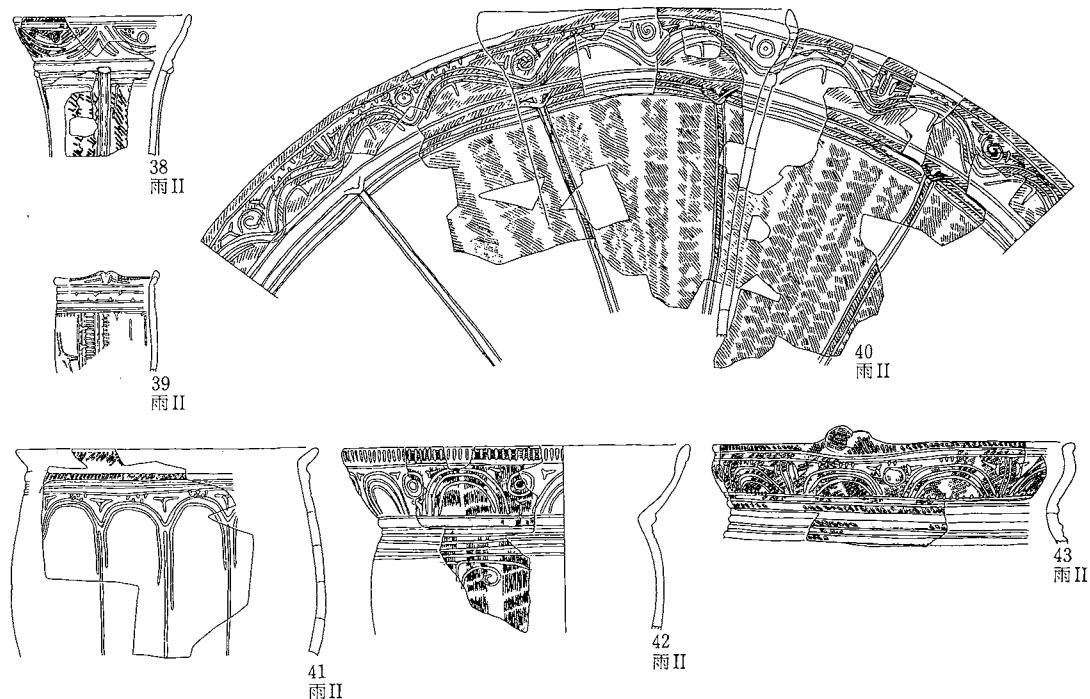


第89図 繩文時代中期初頭土器集成(1)

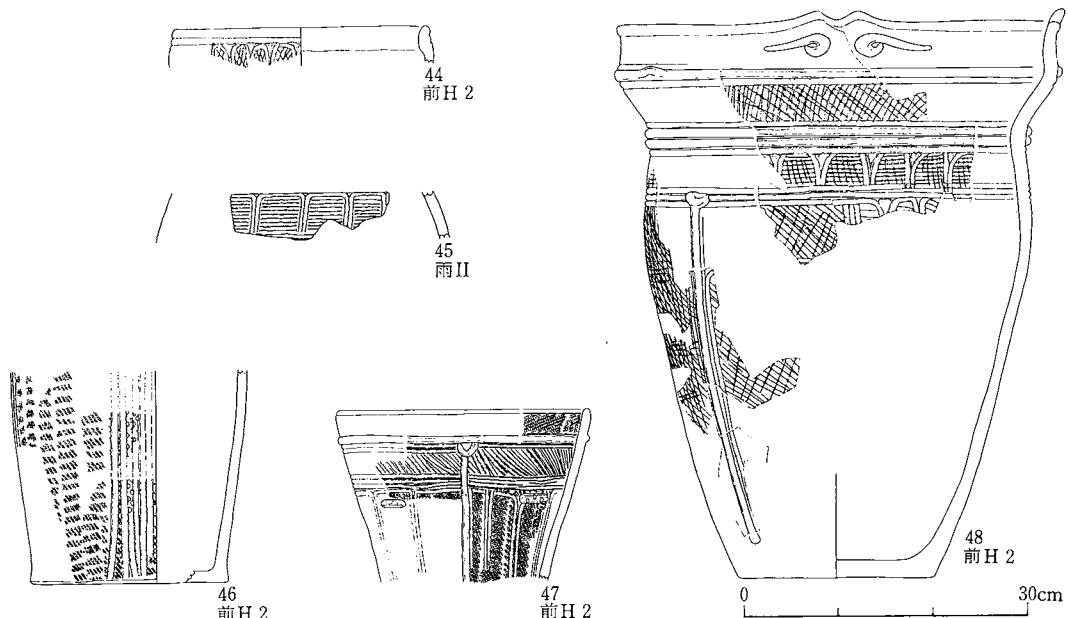


第90図 縄文時代中期初頭土器集成(2)

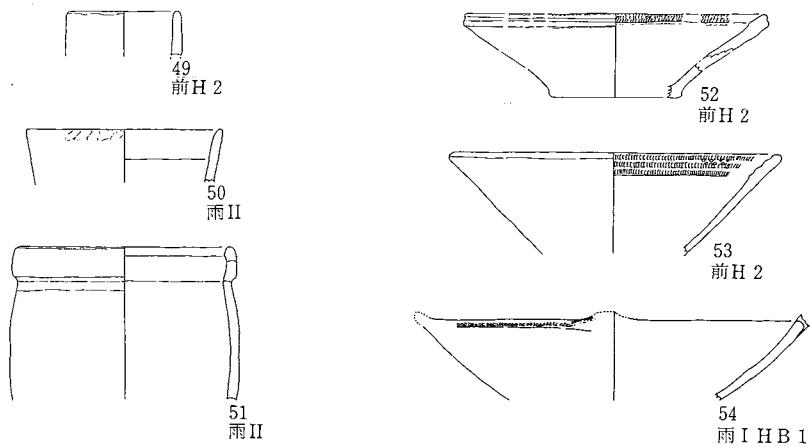
第3段階



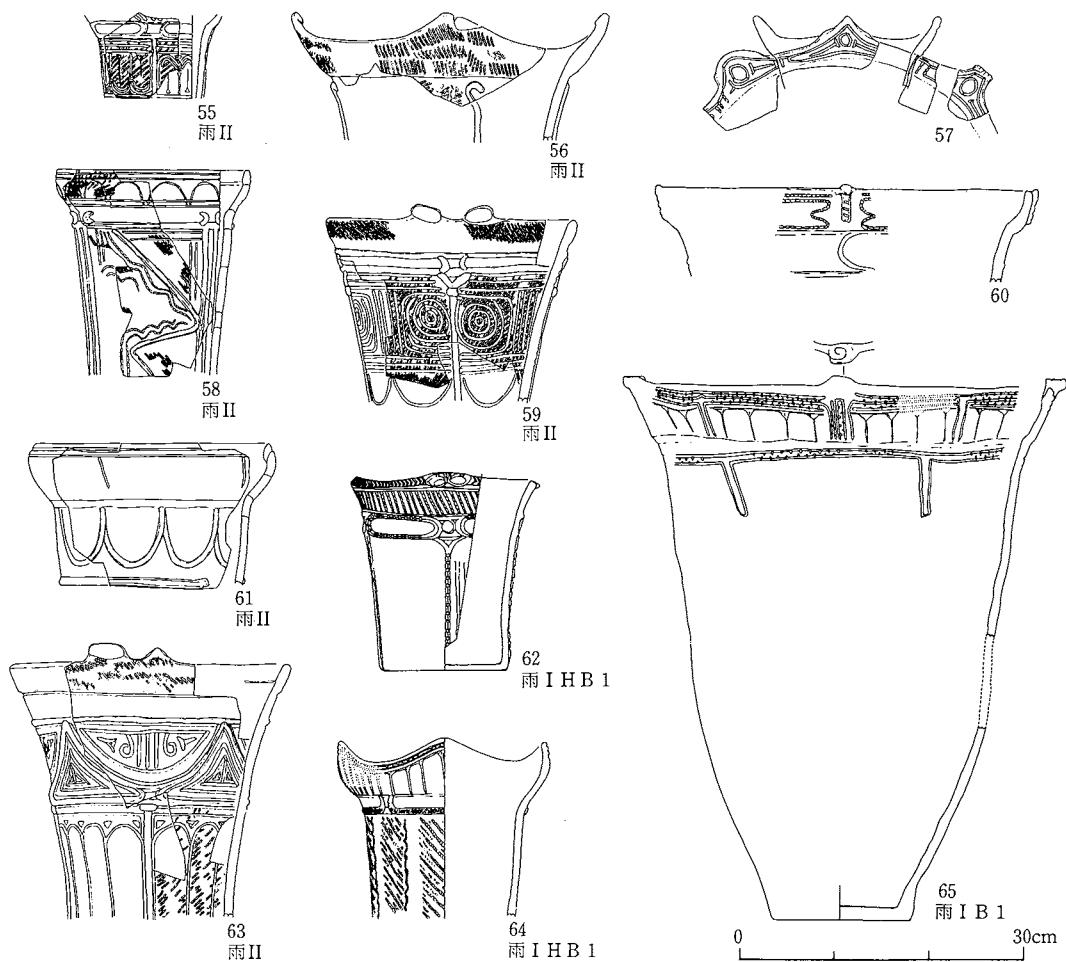
第3・4段階



第91図 縄文時代中期初頭土器集成(3)



第4段階



第92図 繩文時代中期初頭土器集成(4)